

フィリップの「罪悪感」とロスの「責任」

— *The Plot Against America* における罪の形

近藤 佑樹

全学共通教育推進機構

現代アメリカ文学を代表するユダヤ系作家フィリップ・ロスの *The Plot Against America* (2004) は、半世紀にわたる長いキャリアにおいても異色作だと言える長編だ。本作は、1940年のアメリカ大統領選に、フランクリン・ルーズベルトではなく、かの有名飛行士チャールズ・リンドバーグが当選し、そこから生じていく社会の狂乱をロス本人が自らの少年時代、つまりフィリップ少年の少年時代を回想する形で描く歴史改変小説である。リンドバーグ大統領の反ユダヤ主義的発言は、フィリップ少年や彼の周りのユダヤ系アメリカ人への差別行為の容認と化し、彼らを追い詰めていく。当時まだフィリップ少年は当然罪なき被害者である一方、後に詳述するように、彼の行動が想定外の結果をもたらすことになる。

この作品の見立てとしては、“Some readers are going to want to take this book as a roman à clef to the present moment in America. That would be a mistake” (Roth, “The Story Behind” 12) とあるようにロス本人は否定しているものの、ブッシュ政権を批判したポスト9.11小説として読めることがまず指摘できる。それに加え、本書の出版後10年以上の時が流れ、トランプ政権が誕生したことを受け、実現してしまった一種のディストピアの「預言書」として再び注目を集めた。メイラン・ソリーによると、“Roth’s account of a celebrity-turned-politician winning the presidency on a platform of fearmongering and “othering” proved more prophetic than he could have predicted” (n.pag.) とあり、恐怖を煽り、排除のレトリックを取り入れたトランプとリンドバーグとを重ね合わせている。

予見的な視野を備えた本作は、その一方で “Roth makes young Philip’s experiences into a dazzling tragicomedy. The gravity of the Jews’ experiences and the realization that such mistreatment could happen to Jews or other minorities in this land of the free and home of the brave causes *The Plot Against America* to be a very painful work” (Safer 149) とあるように、一種の悲

喜劇としても読めるだろう。このように、本作は一つの読みに決して限定されない小説であることは間違いないだろう。

ロス作品において、主要登場人物たちが不条理な世界に生きなければいけない、という設定、あるいは、作中で被害者が突如加害者に転じてしまう悲劇が描かれること自体は決して珍しいことでない。例えば、ロスのデビュー作品集 *Goodbye, Columbus* (1959) の中に収録されている短編 “Defender of the Faith” では、主人公のマルクス軍曹が訓練兵シェルドン・グロスパートに、自分は宗教上、つまりユダヤ教に関する理由から、太平洋の戦場送りはやめてほしい、と懇願されるがそれをマルクスは拒む。うまくシェルドンは別のユダヤ系の上官を説得することに成功するものの、マルクスは自らの権限を使ってそれを覆し、彼も戦場送りにするという物語だ。ユダヤ系アメリカ人同士であっても、軍隊内での紐帯は生まれず、マルクスはある種冷徹な軍人として「加害者」側に回ることになる。今回の論考では、意図せずして一種の「加害者」となったフィリップ少年の「罪」というテーマで *The Plot Against America* を論じるが、その議論におけるキーワードは、「犯罪」(crime)、「罪悪感」(guilt)、そして「責任」(responsibility) である。

もちろん、日本語の表記だと、「罪悪」にも「犯罪」にも罪という文字が含まれている一方で、英語に置き換える際は、“guilt” と “crime” という単語に変換しえる。当然ながら両者とも、「個人の本音はどうかであれ、社会規範に鑑みると好ましくない」要素と関連する単語ではある。さらに犯罪となると、法律によって明文化されることで、より厳密に定められるもので、そこには国家権力が必然的に関わってくる。その一方で罪悪感とはそれを抱く個々人の倫理観やその周辺の価値観によって決まるものだ。この国家レベルか、あるいは個人レベルか、という違いに注目して議論を進めていきたい。

本稿ではまず国家レベルでの状態について説明した上で、個人レベルにおいて、フィリップ少年の言動がどのような効果をもたらしたのか検証した上

で、最後にそういった記憶を作品内の作家フィリップ・ロスが書き記している、という構造の持ちうる意味について考えてみたい。

1 アメリカ政府の「犯罪」

Fear presides over these memories, a perpetual fear. Of course no childhood is without its terrors, yet I wonder if I would have been a less frightened boy if Lindbergh hadn't been president or if I hadn't been the offspring of Jews. (Roth, *The Plot Against America* 1)

本作は上記のパラグラフから始まる。上記の2文には“fear”という単語が2度、“terrors”と“frightened”という単語が1度ずつ用いられており、回顧するロスが「恐怖に満ちた子供時代」というイメージを冒頭から早速確立させようとしていることが読み取れる。また、“fear”という言葉が、冒頭の一節と最終章のタイトルに用いられていることで、逃れようのないナラティブ上のループが生まれている(Morgan 108)。さらに、厳密に言えば上記の語り手ロスは、作家として熟年期を迎えた60代のフィリップ・ロスであるが、このロスはこのパラグラフを最後に前景化されることはない。彼は、回想シーンから現代に戻っては来ないのだ。読者はフィリップ少年と同様、第二次世界大戦下のアメリカが生んだ恐怖の渦に飲み込まれたままこの小説を閉じるほかない。上記のMorganが指摘するように、ロスが巧みに構築した別世界の恐ろしきループから我々は決して逃れられないのだ。

このようなフィリップ少年を取り巻く恐ろしい状況を、アメリカ政府というマクロなレベルからまず一度確認していきたい。まずは、第二次世界大戦への非介入主義を訴えるチャールズ・リンドバーグが大統領選に勝利する。“It's not between Charles A. Lindbergh and Franklin Delano Roosevelt. It's between Lindbergh and war” (30)とリンドバーグが演説で主張するように、国際政治を巡る他の複雑な諸要素をいとも簡単に捨象し、聴衆が理解しやすい二項対立的な図式を恣意的に作り上げ、ルーズベルトと現行の戦争とを安易に等号で結びつけるレトリックを用いたことや、観衆を魅了させる彼のカリスマ性が彼が勝利した主な要因だと考えられる。

一方で、一家の大黒柱である父親ハーマン・ロスは

はヨーロッパにいるユダヤ人の同胞たちを救うという大義名分のため、アメリカの参戦を望んでいるが、その願いはあくまでも少数派の一意にしか過ぎない。ハーマンの願いは果たされぬまま、反ユダヤ主義的な陰謀論により増幅されたアメリカ国民の敵意は海遠くのナチス・ドイツではなく、国の内側に、つまり国内のユダヤ系の人々に向けられていくことになる。

国内の大きな動きとしては、リンドバーグ大統領就任後早急に進められた、ユダヤ系統制及び同化のためのOffice of American Absorptionや、ユダヤ系の子供たちにホームステイを体験させる「ボランティア・プログラム」であるJust Folksの設立、都市部のユダヤ系を半強制的に移住させるHomestead 42という政策の施行、そして大統領批判を展開する有名コラムニストウォルター・ウィンチェルの暗殺から始まった暴動、クー・クラックス・クランの台頭による残虐行為などが挙げられる。

本作において、ユダヤ系の人々が直面する状況とは、既にアメリカにあった反ユダヤ主義的な社会基盤の上に、戦時中に日系アメリカ人に対して実際行われた具体的な差別的政策が重ねられたものとして基本的に理解できると言える。本作の終盤では、そもそもあまり大衆の前に姿を現すことがほとんどなかったリンドバーグ大統領が突如失踪することとなる。そこから、彼の息子がナチス・ドイツに誘拐され、人質に取られていたため、リンドバーグ夫妻はヒトラーの意向に従わざるをえなかったのだ、という「どんでん返し」的な事情が説明される。残された大統領夫人のアン・モロー・リンドバーグは、ルーズベルトに大統領の座を譲り、アメリカが第二次世界大戦に参戦することで、現実の歴史のタイムラインと一応のところは合流することとなる。

ここで明らかなのは、政府が国内の混乱に対して無力である、あるいは意図して非介入的であることだ。一見温和に思えそうな形でユダヤ系たちの人々をコントロールし、その一方で彼らに対する、実際の暴力を無視していたという事実は変わらない。たしかに、リンドバーグはアメリカを戦争に巻き込むことこそしなかった、つまり戦争といういわば「大罪」を避けることに表面上は成功する。しかしながら、彼の政権は国民の差別を容認し助長していたため、そういった差別により乱れてしまった秩序に対して全く機能していなかったのだ。

その証拠に、ロス家もアメリカのどこに行っても何らかの差別的言動に出くわすことになる。例えば、旅行先のワシントンDCでは、予約していたホテルでの宿泊を突如キャンセルされ、ダイナーで“loudmouth jew”という差別的な発言を繰り返し耳にする(PAA 78)。まさしく自由な移動と、自らの選んだ場での滞在を許されないような状況がロス家の目の前に立ちはだかるのだ。団欒のための家族旅行であるはずのものが、いつのまにか追放された人々が強いられる「放浪の旅」の様相を呈していく、と言うことさえ出来るだろう。そんな中、ロス家は、飛行機に乗ったリンドバーグが民衆の頭上を実際に飛び回っている場面に遭遇する。人々がリンドバーグ万歳ムード一色の中、彼らはただおびえる他ない。政府方針がアメリカ本土を戦場にさせないためのものであったはずが、ロス家のようなマイノリティにとっては突如として周辺環境が戦場と化してしまうのだ。

2 フィリップの「罪悪感」を巡って

前章にて本作における政府単位、ないし家族単位での混乱に満ちた状況を確認したところで、本章では当時7歳のフィリップ少年の取った行動の持つ意味について検討したい。基本的に、フィリップ少年は周りの状況にただおびえるほかないのだが、彼にはカナダ軍に志願し、前線で戦ったのち片足を失い帰還した、甥のアルヴィンがいた。そしてフィリップ少年は、彼の体のサポートをしてあげるような少年でもあった。

しかし、家族以外の周りの人間となると、やはり7歳の少年だからか、そういった人々を十分に思いやりをするという態度がまだ形成されていないことが伺える。その最たる例が近所の男性ウィッシュヌウだ。彼はがんを患っており、本作内で登場後まもなく自殺することになる。しかし、フィリップ少年は、“My first thought on learning the news was that I no longer had to be fearful of hearing a coughing fit emanating from the dying man in the first-floor flat whenever I was alone in the cellar” (PAA 168) とあるように、ウィッシュヌウを哀悼するというよりも、彼の存在におびえる必要がなくなったと安心する。しかしその一方で、今度は彼が幽霊に化けて自宅の地下室に出没することが懸念の対象となっている(PAA 168)。

また、ウィッシュヌウ氏にはセルドンというフィリップと同年代の息子がいたのだが、別段フィリップは彼を気の毒に思ったり、ケアしようとしたりするようなそぶりを特に見せない。フィリップは自分のこと、あるいは自分の家族のことが最優先事項なのであって、話が展開するにあたって、むしろ彼はセルドンのことを煙たがっていることが見て取れる。その結果、Homestead 42法の下、ロス家がケンタッキー州へ移り住むことを命じられたことを知ったフィリップは、家族に黙ってリンドバーグ政権の一員である叔母エヴェリンに直談判することとなる。

“Can't Seldon and his mother go instead of us?” I asked. “Who is Seldon?” “The boy downstairs whose father died. His mother works for the Metropolitan now. How come we have to go and they don't?” (PAA 216) とあるように、自分たちだけ選ばれたことはフェアでない、とフィリップは訴える。当然ながら彼はアメリカ政府という巨大なシステムの抱える本質的問題を十分に把握できておらず、結果として政府がもたらした問題を隣人に擦り付けることで、自らの限られた共同体の中で互いの脚を引っ張り合っているのだ。

そして、幸か不幸かフィリップの願いは実現する。しかし、その願いには大きな代償が伴った。すなわち、ロス家の代わりにウィッシュヌウ家が強制移住することとなるのだ。そこで引っ越しのために自分のお古の服をセルドンにあげざるをえなくなる、という状況が生じる。ここでアルヴィンとセルドンの描写を比較してみると、

Once having gathered together everything of his I needed, I couldn't have said what I planned to do next. He and I were about the same size, and on the afternoon when I dared to secrete myself in the bin and change out of my clothes and into Seldon's, all I did was to stand there and whisper, “Hello. My name is Seldon Wishnow,” and feel like a *freak*, and not just because Seldon had become such a freak to me and I was being him but because it was clear from all my transgressive sneaking around Newark—and culminating in this costume party in the dark cellar—that I had become a far bigger *freak* myself. A *freak* with a trousseau. (PAA 222;

emphasis added)

The left trouser leg dropped straight down from the knee, a sight generally familiar to adults but one that startled me, even though I already knew of a man with no legs at all, a man who began at the hips and was himself no more than a stump. I had seen him before, begging on the sidewalk outside my father's downtown office, but overwhelmed as I was by the colossal *freakishness*, I'd never had to think much about it since there was never any danger of his coming to live in our house. (PAA 127-28; emphasis added)

にあるように、この *freak* という言葉が、間接的にアルヴィンの脚だけでなく、セルドン本人に対しても使われている点を踏まえると、二人ともフィリップ少年にとって見慣れないタイプの存在であることが考えられる。

ただし、フィリップ少年自身が一番の *freak* であると述べており、セルドンを避けたがる彼の傾向が、ある種の自己嫌悪とも結びついている可能性は指摘しておくべきで、二人が同じように無力なユダヤ系の少年であることに変わりはない。

そんなセルドンだが、移住したケンタッキー州にて彼の母親は暴動の中で殺され、文字通りセルドンは孤児となってしまう。そんな彼をロス家は一時的に引き取ることとなり本作は幕を閉じる。“The boy himself was the stump, and until he was taken to live with his mother's married sister in Brooklyn ten months later, I was the prosthesis” (PAA 361-62) と、片足を失ったアルヴィンをケアした経験があるため、セルドンもサポートを必要とする存在である、という風にフィリップの目には映っており、その意味においてフィリップ少年は、比喩としての義足の役割を担わざるをえないのである。

しかし、ここで再度注目したいのは、その時間の経過の描き方である。本作は1940年11月から1942年の10月までの期間で起こったことを丹念に開陳しているが、このセルドンとの10か月は完全に「早送り」しており、深く触れることはあえて避けているようにすら読者に映る。こういった回想内において、フィリップ少年の目ないし作中で回顧するロスの態度が透けて見える。

現に、最終章でフィリップ少年は、後ろめたさこそ間違いなくあるものの、責任は自分にないと重ねて自分に言い聞かせている。

Not that I'd identify myself as Jewish once I reached Omaha. I'd say—speaking aloud at long last—that I didn't know what I was or who. That I was nothing and nobody—just a boy and nothing more, and hardly the person *responsible* for the death of Mrs. Wishnow and the orphaning of her son. (PAA 349; emphasis added)

“I didn't mean for them to move,” I whispered. “That was a mistake. I'm not who's really *responsible*. I didn't mean to make Seldon the target.” (PAA 350; emphasis added)

以上の引用にあるように、自分がサバイバルできるのかという恐怖が罪の意識や責任の所在よりも大きいことが伺える。つまり、全面的に自らの罪悪感や責任感と向き合っていないということが言える一方で、彼の言動がもたらしたものは、テキスト内にたしかに埋め込まれていることを考えると、フィリップ少年の影の部分が垣間見える。もちろん、現実の著者であるフィリップ・ロス、つまり物語内で回顧するロスではない著者本人がここで倫理的に曖昧なフィリップ少年の言動を省くこともできたはずである。そもそもこの「歴史小説」があくまでも「もしもの事態」を想定したフィクション作品であることを思い返すと、本作に上のような要素を見出せるのは決して偶然ではないだろう。

そこで、果たしてフィリップ少年、あるいは回想する老ロスはその罪から逃れることができているのだろうか。換言すれば、そのように読み取れる要素を本作の中から見出すことはできるのだろうか。次章ではその問いに答えていく。

3 「責任」= 応答可能性としての執筆

本章は、*The Plot Against America* において、無垢ではあるが一方で大変残酷とも言えるフィリップ少年の「罪」なるものがたしかに記されていることを受けて、実際その罪への責任を意識している箇所が本作に見出すことができるのか検討するものである。その検討を進める上で鍵概念となるもの

が、前章の引用でも登場した「責任」(responsible: responsibility)という一語である。

本作は、Roth Booksと呼ばれる作品群に属するもので、その最終作だと言える。トータルで5作あるこのRoth Booksは、フィクションとノンフィクションとの間で常に揺れ動いており、虚実皮膜的な要素を多分に含む作品群である。

そして最初のRoth Bookである*The Facts: A Novelist's Autobiography* (1988)という「自伝」において、ロスはファクト(事実)と思わしき自伝パートを、筆者Rothと彼の分身であるNathan Zuckermanとの交換書簡で挟み込むような形で読者に提示している。そこでは“*I've read the manuscript twice. Here is the candor you ask for: Don't publish -- you are far better off writing about me than "accurately" reporting your own life*”や“*What you choose to tell in fiction is different from what you're permitted to tell when nothing's being fictionalized*” (Roth, *The Facts* 161)とあるように、ロスはあまりにも自分のことを都合よく描きすぎだとザッカーマンに強く非難されている。いくら自分とかなり似ている存在であるにもかかわらず、ザッカーマンはロスにとって一切の忖度抜きで自分をジャッジする、一種の「他者」でもある。極めて罪深い存在として作品内で自分自身を批判してきたロスに、自らの手を汚すことなく執筆などできない、という自覚はあると言える。

この背景には、ロス本人がユダヤ系アメリカ人への同族嫌悪的な描写、あるいは女性蔑視的な描写などで批判されてきたという認識がある(Witcombe n.pag.)。つまり彼は小説家としていわば「罪深い」人間として叱責されてきたこともあり、批判される余地を十分に残しておいたまま創作するという彼のパターンは彼が恐らく意識的に書き続けてきたものなのだろう。

このようなコンテキストを念頭に置くと、フィリップ少年の経験を回顧するという構造から、老いた筆者ロスが、フィクションではあるが、自分の子供時代について、非常に詳しく執筆することにより、自らの過去に対して何らかの責任を負おうとしているのではないかと考えることができる。

ここで「責任」という言葉が意味するところは“responsibility” (response + ability)、すなわち「応答可能性」と訳されることのある概念のこと

だ。ジャック・デリダによると、「責任とは、もっとも信念に満ち、もっとも説得的な意見によれば、応答すること、すなわち他者と法の前で他者に応答することであり、そして可能ならば、みずから公的に、みずからの意志によって、みずからの目的を持って、そして責任あるとみなされる動作主の名において応答することにほかならない」(『死を与える』59)。

また、「責任(レスポンスイビリティ)は応答(レスポンス)と結びついている。応答とはなんだろうか。それは返事をするのだが、返事をするといっても応答において大切なのは、その人が自分に向けられた行為や自分が向かい合った出来事に、自分なりの仕方で応ずることである。自分なりの仕方でというところが大切であって、決まりきった自動的な返事しかできていないのならば、その返事は応答ではなくて反応になってしまう」(45)と國分功一郎が極めて平易に説明しているように、問いかけられた際に、単に機械的な返答を簡易的に行うというよりも、自分だからこそ可能な形で、なおかつ内実を伴った形で応答する必要というものが“responsibility”という1語から引き出せる。

加えて、小林昭博によれば、「「責任」を「応答」から理解するということは、西洋思想にとっては当然のことである」ことであるし、ラテン語のrespondeoには、「保証する／約束する」と「応答する」という二つの意味があることから知られるように、西洋思想における「責任」とは、「ある約束に対してなされる応答」を意味するのである(42-43)。このように、デリダのresponse + abilityという、一見単なる言葉遊びのように思える指摘にも西洋思想の長い歴史において綿々と引き継がれてきた基盤があることを確認できる。

たしかに、*The Plot Against America* について議論する上で、現在の自分が過去の自分を書く、ということは誰が誰に責任を取っているのか、という問題が浮上するかもしれない。つまりレスポンスはコールがあってのものだ、という一般的な解釈の問題である。しかし、それは、一つは語ってこなかったというその沈黙に答える、ということでもあるし、デリダ的な表現を用いれば、実は「応答するところ」が起源であるという考え方も出来る。実際のところ、作家ロスが、フィリップ少年という自分でもあり同時に、創作した過去の自分、という意味で一

種の他者でもある存在に対して何らかの応答をしている。つまり、自分自身がまぎれもなく自分である一方、「まったき他者」としての性質も帯びている訳であって、どこが起源なのかは定まらないのだ。

しかしながら、どこに起源を見出すにせよ、この物語は「この子は自分が面倒をみる」と、ロス自身が期せずして過去の自分の親になったような物語であるという読みができると言えるだろう。

本作でも見られるように、ロスは父親の視点から、父が自らの子を育てるということをあまり描いてこなかったと言える。ロスの作品内の関心は、親として子供を育てることよりも、子供として親に育てられることに集中していたと考えられるし、その傾向は初期作品から顕著である。本文の第2章の引用部分でさきほど“responsibility”という言葉拾い上げて議論したように、責任を持つとしないフィリップ少年を、たしかにロスはあえて描いている事実は一つとして指摘できるだろう。

先述の義足描写の箇所でも触れたように、*The Plot Against America* は、失われたものの補填・補完というモチーフから読み解くことのできる小説だとするならば、幼かった自分の物語の負の側面から目をそらすことなくそれを描いてしまう、ということは親として子の不足している部分を埋めてあげるといった意味合いを読み取れるだろう。

本作中ではフィリップ少年の両親（ハーマンとベス）はまだ健在であるし、後に二人を襲うこととなるがんの病魔ともこの時点では二人は無縁だ。しかし、実際のフィリップ・ロスの人生の時系列からすると、彼は母親を既に亡くしているし、ノンフィクション作品である *Patrimony* (1991) では既に自分の父親と過ごした、最期の長くも短い辛い日々を描いている。その観点からすれば、2004年の時点で、リアルタイムで自らの過去を自伝的な形でフィクションにできるのは、父親ではなく自分自身しかない。

こう考えると、先述の引用にあった、最後の prosthesis を巡る描写も、自分自身をサポート役に回すことで、つまりセルドンに対して従属することで、一種の罪滅ぼしを行おうとした、彼なりの責任を結果として取らざるを得なくなった、という読み方をすることも出来るだろう。ただ、本当に「贖罪」をしているのは誰か、と読者我々が一步下がって全体の構造を見てみると浮かび上がってくるの

が、作中のレベルにおける語り手ロス本人だ。本論の冒頭で少し触れたように、1頁にも満たない冒頭の記述における主語は、子供のフィリップ少年ではなく、半世紀以上後になって子供時代を回顧しようとしている筆者のフィリップ・ロスであるのだ。

また、冒頭のパラグラフ一つに本作全体のテーマが明示されている点を本文の冒頭で指摘したが、今までの議論で指摘してきた点を踏まえれば、当箇所は本作読解における別の可能性を隠蔽していたとも言えるのだ。例えば、“Fear presides over these memories” という記述も、恐怖が自らが負ってもおかしくない責任の上に折り重なっていく様子をロスは回顧した、という読みにつながれると言える。ただ、もちろんそれはこの小説内のロジックであり、その外の次元にはでっち上げの回想をしているロスを書いている現実のロス、という構造があるということは指摘しておきたい。このように、いわば複数の語りのレイヤーがある本作に、「責任」という概念を補助線として引くことでその意義をある程度明確にすることができると言えよう。

本論文では、国家規模としての犯罪をまず確認することで、被害者を加害者にしてしまう構造が生じていることを明らかにした。その上で個人としての罪悪感の有無、という問題が浮かび上がってくる。そして浮上してきた問題に一種の責任 (responsibility) を負うのは、自分の空想の過去について応答 (respond) するという形で執筆する／回顧する作中のロスであるのだ。

本論の冒頭にて言及した通り、読者は、この小説を現代アメリカにおけるディストピア作品として読み解くことで、ブッシュ、あるいはトランプ政権に対しての辛辣な批判を事後的に見出すことが出来るし、近い将来再び別の政権を念頭に読み継がれていくことも想定できる。そういったマクロな読みとは対照的に、たとえ虚実混交的であったとしても、本作はフィリップ少年を主人公としたパーソナルな作品であるし、歴とした「家族小説」としての側面もあるだろう。そういった意味ではたとえフィリップ少年であってもある種の「加害者」となり得るし、その行為の重大さについて語る大人の責任の所在も本作内では問われていると言える。このような読みを導入することで、アメリカ社会の「預言書」としての認識から少し距離を置いた形で、この作品に新たな可能性が見出せるはずだろう。

本稿は日本アメリカ文学会関西支部2021年1月例会若手シンポジウム「アメリカ文学と罪」(オンライン開催)の発表原稿に加筆修正を施したものである。

註

1. フィリップ少年の担う義足的役割に関しては Kondo (2021) を参照されたい。

参考文献

- Derrida, Jacques. *Adieu to Emmanuel Levinas*. Stanford UP, 1999.
- Kondo, Yuki. "Corporeality during Wartime in Philip Roth's Late Works." Dissertation, 2021.
- Morgan, Glyn. "Reimagining Horror: *The Plot Against America* (2004), *Farthing* (2006), *A Man Lie Dreaming* (2014), and *J* (2014)." *Imagining the Unimaginable: Speculative Fiction and the Holocaust*. Bloomsbury Academic, 2020.
- Roth, Philip. *The Facts: The Novelist's Autobiography*. Vintage, 2007.
- . *Goodbye, Columbus and Five Short Stories*. Vintage, 2016.
- . *Patrimony: A True Story*. Vintage, 1996.
- . *The Plot Against America*. Vintage, 2005.
- . "The Story Behind *The Plot Against America*." *New York Times Book Review*. Sep 19, 2004, pp.10-12.
- Safer, Elaine. *Mocking the Age: The Later Novels of Philip Roth*. (State U of New York P, 2006)
- Solly, Meilan "The True History Behind 'The Plot Against America' ." *Smithsonian Magazine*, 2020, <https://www.smithsonianmag.com/history/true-history-behind-plot-against-america-180974365/>. Accessed 11 Jan 2022.
- Witcombe, Mike. "Was Philip Roth A Misogynist?." *The Conversation*, 2018, <https://theconversation.com/was-philip-roth-a-misogynist-97114>. Accessed 23 Jan 2022.
- 國分功一郎、熊谷晋一郎『〈責任〉の生成 中動態と当事者研究』新曜社、2020年。
- 小林昭博「マルコ受難物語における応答：レヴィナス、デリダ、責任＝応答可能性」『神学研究』59

号、p.34-48、2012年。
デリダ、ジャック『死を与える』広瀬浩司、林好雄
訳 ちくま学芸文庫、2004年。